木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2011 秋
Vol.80
平成 23 年

地域の歴史
木曽川支流・可児川の沿川に発展した宿場町・御嵩(みたけ)町

地域の治水・利水施設
木曽川支流・可児川の治水と利水

歴史記録　輪中堤の変遷　第二編
輪中(わじゅう)の形成過程とその年代

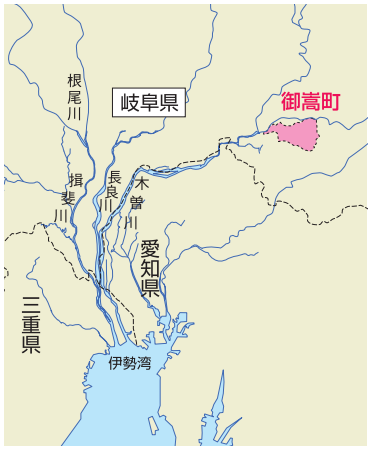
研究資料　大喜多 啓介
木曽岬町文学散策

地域の歴史

木曽川支流・可児川の沿川に発展した宿場町・御嵩町

可児川流域に発達してきた御嵩町は、古代から開けていた地域で官道・東山道が通っていました。江戸時代には中山道の宿場として御嵩宿・伏見宿が賑わい、明治以降も東濃の中心地として商業が進展しました。現在は、東海環状自動車道の開通などにより、工場誘致が進んでいます。

御嵩城址より市街地を望む



可児川沿いの歴史の町

岐阜県可児郡御嵩町は、県の南西部、太田盆地の東部に位置し、北と南は丘陵地になっています。東の瑞浪市との境にある鬼岩を発した木曽川の支流・可児川が、広い河岸段丘を形成しながら町の中央を西流しています。江戸時代には可児川に沿って中山道が通り、宿場町が設けられました。

現在、中山道のルートには国道二一号が走り、中央自動車道にも近いので、岐阜市や名古屋市へのアクセスの良い立地になっています。加えて平成一七年(二〇〇五)の東海環状自動車道開通によって、愛知県三河地方と結ばれ、豊田市までは四五分でアクセスできるようになりました。鉄道は名鉄広見線(犬山～御嵩)が通勤・通学などの足として町民に利用されています。

東山道可児駅の所在地

御嵩町で確認されている人間の活動の最古の痕跡は、伏見で発見された旧石器で、約三万年以前のものと推定されています。縄文時代の遺跡は、近隣の可児市などに比べると少なく、一〇ヶ所程度が遺跡散布地として確認されています。弥生時代の遺物としては、弥生中期の甕が上之郷中切で出土しており、御嵩町域に稲作が伝播してきたのも中期頃であろうとされています。稲作の定着によって、部族的集団が発生し、やがてより大きな集団が木曽川左岸・可児川流域の平坦地に小さな国を形成していったと考えられます。

こうした国々は大和に興った大和朝廷が勢力を拡大していく過程で、次第に従属し、地方に古墳文化が広がりました。御嵩町域には、現存するものから、過去に存在が確認されているもの、伝承によって存在したと推定できるものまで合わせると総数は二〇〇基近くになります。その多くが可児川右岸の丘陵地に集中しています。

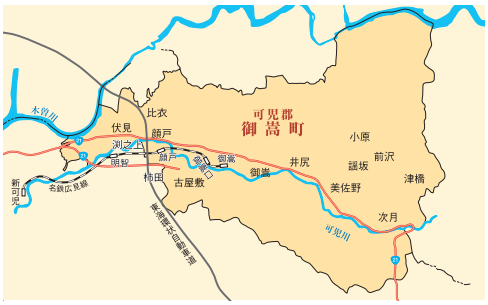
東寺山古墳

古墳群の存在が示すように当地は古代から開けた地域であり、大和朝廷の東日本への進出経路になっていました。古代の官道七道の一つ東山道は、可児郡下では各務駅～可児駅～土岐駅の宿駅が置かれており、この内可児駅は上之郷字宿にあったと推定されています。『和名類聚抄』に可児郡には、可児・郡家・日里・大井・矢集・池田・駅家の七郷が記されていますが、郡家は御嵩町の顔戸付近であったと『濃飛両国通史』では比定しています。

律令制が崩壊した後の御嵩町域には、中村荘を中心に東に小泉御厨、西に荏戸荘・明知荘が存在していたことが、春日神社に残されていた中村荘の官宣旨(太政官から諸司や寺社などに下した公文書)に記されています。

斉藤妙椿と顔戸城

源頼朝は鎌倉幕府を開くと文治元年(一一八五)に全国各地に守護・地頭を御家人のなかから任命派遣しました。地頭は治安維持の名目で荘園・公領に置かれましたが、次第に実効支配権を獲得し、地域の支配者となっていきました。御嵩町域では上中村の纐纈氏などが有力な地頭で



顔戸城址

した。

鎌倉幕府の守護は、軍事・警察権の行使が主な任務であり、経済的権能は付与されておらず、在地の地頭が領主的な権限を得ることができました。しかし南北朝時代を経て室町幕府の時代になると、守護に経済的な権益が与えられ、地頭の地位は、守護に被官する国人へと変質していき、守護領国制が成熟する室町中期までに地頭は名実ともに消滅しました。美濃国では、守護である土岐氏と守護代斉藤氏が権勢を得て国内の武家を配下に収め全国的にも強大な勢力となっていきました。

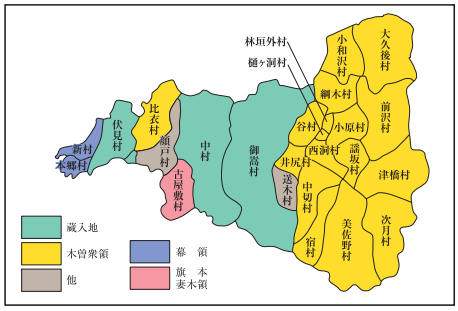
長禄四年（一四六〇）頃に守護代となった斉藤妙椿は、応仁の乱では「妙椿の動向は土岐氏のみならず、中央の政権をもゆるがす」と言われるほどでした。この乱で西軍に属した斉藤妙椿に対して、東軍は信濃から恵那郡・土岐郡に侵攻したので、妙椿は御嵩町顔戸に築いた顔戸城を強化して反撃しました。交通の要衝であった当地には、戦国時代にかけて顔戸城のほか御嵩城（可児川岸の権現山）や上恵土城（伏見）があったといわれています。

尾張藩支配と中山道

江戸時代の御嵩町域は本郷村・新村の二ヶ村が幕府直轄地、古屋敷村が旗本領で、これ以外は尾張藩領でした。尾張藩領のうち六割ほどは藩の直轄地（蔵入地）で、残りが家臣の給地や寺領で、木曽衆と呼ばれる人達の給地が多いことが特徴的です。

木曽衆は戦国時代に木曽谷を支配していた木曽氏の旧臣で、豊臣政権下で当主木曽義利が伯父を殺害するという暴挙によって改易となり、浪人となった一団でした。関ヶ原の戦いの際、徳川方に味方して木曽谷を押さえた功績によって、美濃に一万六千石を与えられました。家臣団の有力者であった山村氏は木曽代官として木曽福島に赴任し、千村氏など多くの家臣団は久々里に屋敷を構えましたが、その後、木曽衆は給地はそのままで尾張藩に付属することとなりました。

慶長七年（一六〇二）二月、御嵩に「御嵩宿伝馬朱印状」が出され、中山道御嵩宿が発足しました。中山道でいち早く御嵩宿に朱印状が下知されたのは、御嵩が美濃の平野部と東濃山地から木曽へ続く山路の出入口的な位置にある要衝であることを示しています。江戸から四九番目の宿場で、初めは幕府直轄地でしたが元和元年（一六一五）から尾張藩領となっています。御嵩町内には、御嵩宿の西に江戸から五〇番目の伏見宿もありました。伏見宿は元禄七年（一六九四）土田宿の廃止に伴って開かれたとされ、施設としては御嵩宿同様に問屋場、本陣・脇本陣、高札場などがありました。



江戸時代の領主

御嵩宿

明治以降の産業の変遷

明治に入った御嵩町は、中山道の宿場としての賑わいは無くなったものの、東濃四郡の中核的官公庁や文教施設が置かれ商業の進展が見られました。一方で養蚕の発達とともに製糸工場が町のあちこちに建てられ繁栄しましたが、戦後の化学繊維の発達などによって衰退しました。また明治初年に発見された亜炭鉱は、戦中戦後には燃料として全国屈指の生産を誇りましたが、昭和四〇年頃にはエネルギー需要の変化によって全く採鉱されなくなりました。

こうした衰退産業に替わる産業として御嵩町は積極的な工場誘致を行っており、特に東海環状自動車道の開通に合わせて整備された工業団地『グリーンテクノみたけ』は、町の振興に大きく寄与しています。また、鬼岩公園や東海自然歩道などの豊かな自然と、宿場町や古刹など歴史スポットを生かした観光開発も進んでいます。

東海環状自動車道

■参考文献
『御嵩町史　通史編』平成四年　御嵩町
『岐阜県の地名』平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』
昭和五五年　角川書店

木曽川支流・可児川の治水と利水

御嵩町を貫流して、可児市土田地先で木曽川に合流する可児川は、古来より沿川の平坦地を潤してきましたが、その流量は灌漑面積に比して少なく水不足が慢性化していました。一方、大雨が降ると河川が氾濫して、人家や田畑が冠水する水害をひきおこす暴れ川でもありました。

可児川（新川橋より）

ままならぬ川・可児川

御嵩町は、山に囲まれた小盆地で、中央部を東から西方に流れる可児川やこれに流入する小河川に沿う平坦地や山間部の僅かな土地を利用して農業が行われてきました。河川に堰を築き用水路で引水し、また小河川の上流部に溜池を築造して用水としていましたが、この地域は年間の平均降水量が一五〇〇～二〇〇〇㎜と比較的少なく、可児川の流れも細かったので慢性的な水不足の状態が続いていました。

可児川から取水する用水は、古屋敷（ふるやしき）村で取水して、可児川左岸八ヶ村の広い水田地帯を潤す明知用水が、古来から重要な役割を担ってきました。また、寛永（かんえい）一〇年（一六三三）には顔戸村で取水して五ヶ村が利用する顔戸用水が築かれています。しかし、両用水とも日照りになると十分な水を確保することはできないので、堰や用水路の改修・新設などをきっかけに多くの水争いを起こしてきました。

可児川左岸の水田風景

こうした水不足の一方で、可児川は河道が蛇行している上に川床が高く、また流入している小河川が山地から急流となって下ってくるので、大雨が降れば急激に増水し、川沿いの水田はもちろん住宅地なども冠水する水害を度々起こしてきました。

安定した用水の確保が難しく、いったん大雨になると出水し冠水する、可児川は「ままならぬ川」と言われていました。

防災ダムの建設

水不足と水害、この二つを同時に解消するため、可児川水系流域一帯に九ヶ所の防災ダム（溜池）を修築・新設する計画が立てられました。防災ダムは、急激に流れる出水を調節し下流を洪水被害から守るとともに、出水期以外は貯水池として灌漑用水供給源にするというものでした。

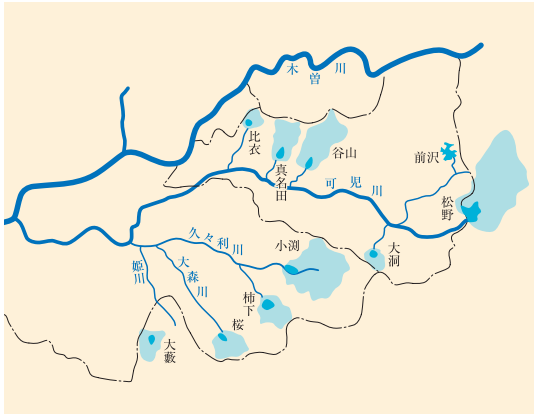
計画は昭和二二年度より着手され、昭和三〇年度までに松野池を除く八ヶ所が築造を完了しました。当時は機械化が進んでいなかったので、発破で崩し、トロッコで運搬する人手作業が中心でした。

防災ダムの管理組織として、昭和二九年に受益関係町村による「可児郡可児川防災溜池一部事務組合」が設置され、防災ダム管理規制に基づいて、洪水時には出水を一時ダムに貯留し、下流河川の水位が下がったときに放流し、次の出水に備えるようにしました。

谷山防災溜池

県下最大の農業用溜池・松野池

昭和一〇年頃、松野（現瑞浪市）集落一二戸を立退きさせ鬼岩公園奥にダムを造り、この水を可児川に流す計画が宮瀬（現可児市）の可児義男個人から提案され賛同する者もいましたが、本人の病気で実現には至りませんでした。その後、この提案が再浮上し、昭和一八年に岐阜県耕地課



防災溜池・集水域と前沢ダム湖

が現地調査・測量を行いました。戦時中は中断がありましたが、昭和二八年県営の可児川防災溜池事業の一つとして着工の運びとなり、用地買収・建設用道路・仮排水施設・コンクリート止水壁の工事が施行されました。

ところが、昭和三一年に松野池を、可児川防災溜池事業のほかに、当時計画が進められていた愛知用水の補助溜池として共用する話が持ち上がり、調査検討のため、松野池建設工事が一時中断されました。検討の結果、防災と農業用水両面に費用と役割をふりわけることで、昭和三三年に愛知用水と平行して事業が進められることになり、工事が再開されました。

昭和三七年に完工式が行われ、洪水調節用九六・三万立方メートル、農業灌漑用水二三五万立方メートル、計三三一・三万立方メートルの有効貯水量をもつ農業用水池としては岐阜県下最大の人造湖が誕生しました。

また、松野ダムの建設計画が進む昭和三二年に、可児土地改良区が設立され、可児川中流の顔戸で取水し、伏見地区中央部とその西に広がる上恵土一帯の河岸段丘を潤し、可児市川合地先で愛知用水幹線水路に流入させる計画を立て、昭和三五年に着工しました。顔戸取水口からの幹線水路は、高倉地内を通り、野崎より地下トンネルで上恵土地区の中心を流れて西に延びています。

用水不足を補う前沢ダム

可児川中流域一帯は、全国屈指の亜炭鉱の採掘地でしたが、昭和三二年以降は衰退の一途をたどりました。採掘に伴い大量の深層地下水が可児川に流入していましたが、廃鉱によってこの流水が無くなり、可児川の流量が減少し、可児川から取水していた約四八四ヘクタールの耕地が用水不足となりました。

この事態に対処するため、県は可児川支流・津橋川の最上流部前沢地内にダムを築き灌漑用水の確保を図りました。この前沢ダムは「県営灌漑排水事業可児川用水」として昭和三九年に計画され、昭和四五年から工事に着手しました。昭和五四年に竣工したダムは中心コア型アースダムで、ダム湖の総貯水量は二〇二・五万立方メートルとなっています。

前沢ダム湖

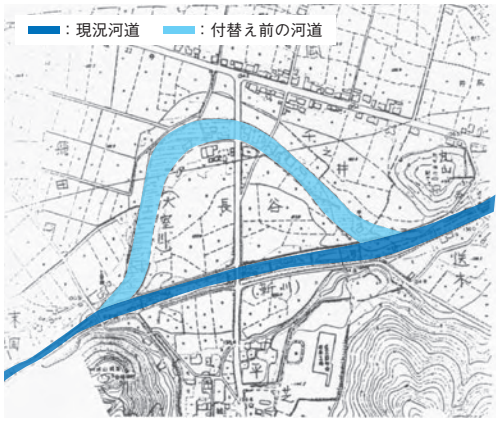
可児川の治水と七・一五豪雨災害

古来より大雨の度に氾濫を繰り返してきた可児川では、水害を防止するための河川改修が行われてきました。御嵩町井尻地内丸山の南から平芝川合流地点までの可児川は、現在では直線的に約四〇〇mの河道となっていますが、以前は千之井・飛田地内に大きく湾曲する約七〇〇mの河道でした。この湾曲部が度々氾濫するので、昭和七年から一年半に及ぶ大工事により現在の河道に付け替えられました。

こうした河道変更や川幅の拡張、護岸の強化、防災ダムの建設などの積み重ねによって、可児川の治水安全度は向上し、制御された河川として流域の人々に親しまれてきました。

しかし、平成二二年七月一五日の豪雨では、可児川が可児市土田地先で氾濫、近くの市道が冠水して通行中の車両を押し流し、死者一名・行方不明者二名の犠牲者が出ました。また、可児川に隣接する駐車場から四七台のトラック・乗用車が流されて、トラックが将棋倒しのように積み重なる惨状には、自然の脅威を見せつけられました。

この時、御嵩雨量観測所では一七時からの六時間で二三八ミリの雨量を観測しましたが、これを確率評価すると概ね一三〇年に一度発生する規模の降雨であったことから、岐阜県では今後はハード・ソフト両面から安全度を高めるとしています。



可児川流路付け替え

国土交通省排水ポンプ車による復旧作業

■参考文献
『御嵩町史　通史編』平成四年　御嵩町
『岐阜県の地名』平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』昭和五五年　角川書店

輪中堤の変遷 第二編

輪中の形成過程とその年代

木曽三川下流部の輪中は、自然堤防・後背湿地地域とデルタ地帯に立地していました。デルタ地帯では、それまで集落が存在していた微高地を中心として開発された輪中の他に、人が住めなかった砂洲を築堤によって干拓する干拓輪中が江戸時代中期から形成されました。

木曽三川下流部の輪中

前号「輪中堤の変遷　第一編」では、輪中が存在している地形上の特性を指標として、Ⓐ扇状地末端の輪中、Ⓑ自然堤防・後背湿地地域の輪中、Ⓒデルタ地帯の輪中の三つの類型に大別しました。この類型区分によって木曽三川下流部の輪中を区分すると、概ね左図の緑色ラインを境に、右側(上流)の輪中は類型Ⓑに属し、左側(河口)に移行するに従い類型Ⓒに属する輪中となります。今号では、木曽三川下流部の輪中を、それぞれの形成の経緯・年代や構成する村について記していきます。ただし、高須輪中については次号にて特集しますので、本号では省くことと

木曽川下流事務所管内の輪中分布図(明治の三川分流工事直前)

します。

木曽川左岸の輪中

①立田輪中

輪頂部から下流に向けて西に木曽川、東に佐屋川(明治三二年廃川)が流下し、両川は立田輪中の南端で再び合流していました。南北に細長い大輪中で、北部に佐屋川から分かれて木曽川に注ぐ間ノ川が流れていたので、その北側は神明津輪中という一輪中でした。

現在の立田輪中堤(愛西市山路)

・神明津輪中

立田輪中の北部に位置し、木曽川・佐屋川・間ノ川に囲まれた一輪中でした。輪中を構成した近世の村は、拾町野村・四貫村・馬飼村・西鵜之本村・神明津村・川北村の6ヶ村で、この内、拾町野村は美濃国中島郡・馬飼村は美濃国石津郡に属し、四貫村・西鵜之本村・神明津村は尾張国中島郡に、川北村は尾張国海西郡に属していました。このように、一輪中が郡だけでなく国まで異なって構成されていたのは珍しいことでした。神明津輪中の成立は、間ノ川右岸堤防の築堤で総懸廻堤が完成したと考えられ、その時期は慶安元年(一六四八)の検地を余り遡らない時点であろうとされています。

・立田輪中

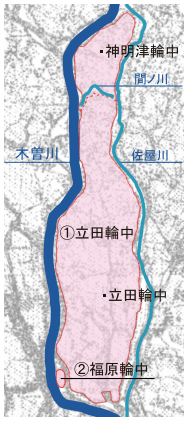
愛知県愛西市葛木～石田～雀ケ森を結んだラインより北東部は自然堤防・後背湿地で、南西部はデルタ地帯となっています。近世以前から自然堤防・後背湿地の村々は自然堤防を中心に開発が進んでいました。また、デルタ地帯でも立田輪中の南端に小江木城があったように微高地が開発されていたようです。

近世には全て尾張藩領で、初代尾張藩主・徳川義直の主導で立田新田が開発された時点で輪中となっていますから、年次としては寛永五年(一六二八)と推定されています。

近世に輪中を構成していた村は、藤ケ瀬村・給父村・江西村・高畑村・元赤目村・立石村・下大牧村・赤目村・塩田村・早尾村・町野村・下一色村・西一色村・高田村・宮地村・葛木村・二老村・石田村・後江村・山路村・上古川村・下古川村・大森村・小茂井村・北条村・内大成村・外大成村・田尻村・小家村・和田村・上立田村・下立田村・富安村・鯉ケ平村・松田村・船頭平村・戸倉村・新右衛門新田村・笹塚村・脇野村・雀ケ森村がありました。

②福原輪中

立田輪中南端西側の砂洲を開発した木曽川の川中島の小輪中で、寛永一二年(一六三五)に開発されたと伝わっています。福原新田村1村がありました。



③五明輪中

現在は愛知県弥富市に属する地域ですが、近世は伊勢国で明治一三年までは三重県桑名郡でした。明治改修以前は、木曽川とその分流・海老江川にはさまれた川中島で、北部の五明村は一六二〇年代に輪中を形成しており、その後、下流の砂州を開発して赤津亀貝新田・小嶋新田が成立しました。

④両国輪中

木曽川分流の筏川（明治二四年締切）・鍋田川（昭和三七年締切）にはさまれ、南が伊勢湾に面する三角形の輪中で、森津輪中（尾張）・加稲輪中（尾張）・稲元輪中（伊勢）が合わさったので両国と称されました。

現在の両国輪中堤（弥富市境町）

・森津輪中

相ノ川（明治一一～一七年頃締切）の北側の輪中で、開発は中央部の森津新田・鎌島新田・芝井新田が正保四年（一六四七）に、下流部の松名新田・寛延新田が宝暦二年（一七五二）、上流部の中山新田・中河原新田・川原欠新田・与蔵山新田が元禄年間（一六八八～一七〇三）から寛永一六年（一六三九）に輪中となりました。三輪中が連続提で囲まれ森津輪中となったのは文政五年（一八二二）から天保八年（一八三七）にかけてでした。

森津輪中は、森津新田・鎌島新田・芝井新田・松名新田・寛延新田・中山新田・中河原新田・川原欠新田・与蔵山新田・間崎新田の新田で形成されていました。

・加稲輪中

加稲輪中と稲元輪中は、西に鍋田川・東に筏川・北に相ノ川が流れ、南が伊勢湾に面する地域でした。加稲新田と稲吉新田の間で鍋田川より分派していた境川が加稲輪中（伊勢国）と稲元輪中（尾張国）の間を流れていました。加稲輪中を構成する村は寛文九年（一六六九）から天保六年（一八三九）にかけて開発されました。

加稲輪中は、加稲新田・加稲付新田・三好新田・富嶋新田・富嶋付新田・稲荷崎新田・加稲九郎次新田・加稲山新田・稲荷崎付新田・富崎新田・境新田・六野新田・上野新田の新田で形成されていました。

・稲元輪中

加稲輪中と稲元輪中の間を流れていた境川は、稲元輪中側に稲狐新田、加稲輪中側に富崎新田が出来ると伊勢湾への出口を失い用水路としての機能だけを持つようになり両国用水路と呼ばれるようになりました。境川が用水路となったのは稲狐新田が開発された宝暦四年（一七五四）と推定されます。稲元輪中を構成する村は、貞享四年（一六八七）から明治二六年（一八九三）にかけて開発されました。

稲元輪中は、狐地新田・稲元新田・稲吉新田・稲荷新田・稲狐新田・三稲新田・八穂新田・三稲外繰出新田・大谷新田・末広新田の新田で形成されていました。

⑤加路戸輪中

西に木曽川とその分流・白鷺川、東に鍋田川が流れるデルタ地帯の干拓輪中で、中央部を東加路戸川（見入川）が南流していた当時は、西部を加路戸輪中、東部を見入輪中といいました。

・加路戸輪中

木曽川本流と東加路戸川（見入川）、白鷺川に囲まれた輪中で、加路戸新田・加路戸堤外新田は、加路戸輪中で最も早く開けた村で、戦国時代に民家八〇〇余戸があったと伝えられています。その他の村は、寛永一五年（一六三二）から文化一〇年（一八一三）にかけて順次開発されました。

加路戸輪中には、加路戸新田・加路戸堤外新田・大新田・外平喜新田・近江島新田・西対海地新田・田代新田・築留新田・雁ケ地新田・白鷺脇付新田・小林島新田・福崎新田・豊崎新田・川先新田の新田がありました。

・見入輪中

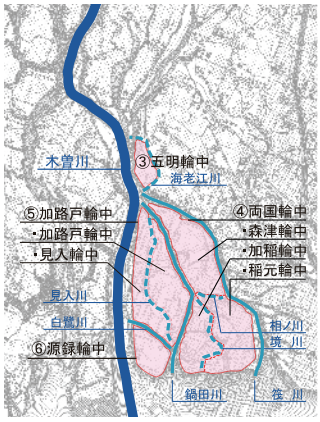
東加路戸川（見入川）と鍋田川に囲まれた輪中で、宝暦八年（一七五四）東加路戸川が廃川になって加路戸輪中に含まれました。寛永一四年（一六三七）から寛文一二年（一六七二）にかけて開発されましたが、富田子新田だけは大きく遅れた宝暦六年（一七五六）の開発となっています。

見入輪中には、見入新田・和泉新田・東対海地新田・小林新田・小和泉新田・中和泉新田・富田子新田の新田がありました。

⑥源緑輪中

木曽川本流とその分流・白鷺川の間、伊勢湾に面した干拓輪中で、高位部にあたる白鷺新田・松永新田が元禄四年（一六九一）開発であるのに、下位部の源緑山新田は文政二年（一八一九）、源緑新田・藤里新田は文政七年（一八二四）開発と年次が大きく隔たっています。

現在の源緑輪中堤（木曽岬町白鷺）



木曽川右岸の輪中

⑦長島輪中

旧長島町の行政区画とほぼ一致する長島輪中は、形成過程によって大きく三つに分けられます。鰻江川（木曽川と揖斐川を連絡する河川で、三里の渡しの航路であったが明治二三～三八年に締め切られた）の北部にあたる狭義の長島輪中、鰻江川と青鷺川（木曽川と揖斐川を連絡する河川で、七里の渡しの航路であったが明治二三～三八年に締め切られた）にはさまれた葭ヶ須輪中、青鷺川以南の横満蔵輪中です。

現在の長島輪中堤（長島町駒江）

さらに狭義の長島輪中は、上郷と下郷に分けられます。

・長島輪中（上郷）

平安時代から自然堤防上に集落が形成された地域で、これらの集落は、江戸時代以前は川中に孤立していました。元和七年（一六二一）桑名藩主松平定勝が七曲輪を一曲輪にまとめたことで輪中が成立しました。

上郷には、松之木村・杉江村・新所村・西川村・高座村・間々村・小島村・出口村・上坂手村・下坂手村・千倉村・平方村がありました。

・長島輪中（下郷）

下郷の村の半数は、一六世紀には開発されていましたが、輪中が形成された元和年間以降に開発された村もあります。

下郷には、西外面村・松ヶ島村・又木村・城下町屋・押付村・殿名村・東殿名村・源部外面・駒江村・十日外面・大島村・藤九郎外面・前山外面がありました。

⑧葭ヶ須輪中

木曽川・揖斐川・鰻江川・青鷺川にかこまれた葭ヶ須輪中は、最北端の鎌ヶ地新田が寛永一六年（一六三九）に開発されてから順次開発されていきました。最南部の都羅新田が安永五年（一七七六）に開発されるまでに七〇年以上かかっています。いったん開発された新田も荒廃と再開発を繰り返すものが多かったようです。

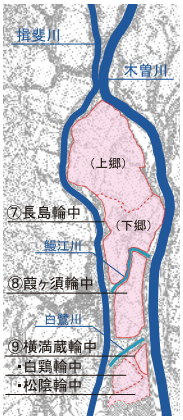
現在の葭ヶ須輪中堤（長島町葭ヶ須）

葭ヶ須輪中には、鎌ヶ地新田・葭ヶ須新田・長地新田・赤地新田・六百新田・福井新田・豊松新田・福吉新田・都羅新田の新田がありました。

⑨横満蔵輪中

横満蔵輪中は、青鷺川以南の伊勢湾に面した干拓輪中で、横満蔵新田・松蔭新田（松蔭輪中）・白鶏新田（白鶏輪中）から成り、江戸時代には老松輪中と呼ばれていました。

横満蔵新田は宝暦七年（一七五七）に、白鶏新田は文政九年（一八二六）に開発されました。松陰新田は、松陰新田・老松新田・寿永野新田・松吉新田・真桃新田・土吉新田・井沢新田・常盤新田・住吉新田・服部新田・富永新田・松高新田の12ヶ村で構成され、文政六年（一八二三）から5ヶ年かけて開発されました。白鶏新田と松陰新田は、幕末の風水害・地震によって大半が亡所となり、明治二二年（一八八九）に明治改修の一環として導水堤が築造された際、再開発されました。



揖斐川右岸の輪中

⑩太田輪中

東に揖斐川、西と南に山除川の輪中堤を持つが、北は川と接していません。太田輪中は、中堤をはさんで東西に分かれていました。中堤の西側の村は、新田村を除いては近世以前に成立していたとされていますが、山除川堤防と中堤を築いて輪中となったのは、正保元年（一六四四）とされています。揖斐川に堤防を築いて、中堤の東側が開発されたのは慶安元年（一六四八）と推察されています。

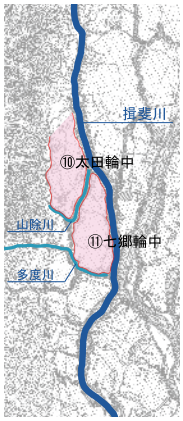
現在の太田輪中堤（南濃町吉田）

太田輪中には、中嶋村・内新田・亀池新田・外新田・下一色村・松山村・太里村・安江村・太田新田・下境村（下境村新田）の村と新田がありました。

⑪七郷輪中

揖斐川右岸の輪中としては最下流部に位置し、東が揖斐川に、西が多度川（香取川）に接しており構成する村々は関ヶ原の戦い直後から開発が始まり、一七世紀前半には大部分の開発を終えています。

七郷輪中には、上之郷村・福永村・古敷村・東平賀村・西平賀村・西平賀新田・南之郷村・大鳥居村・中須村・香取村の村がありました。



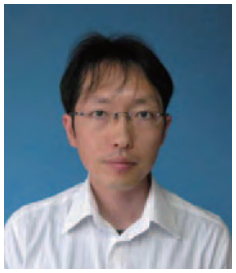
■参考文献

『木曽三川流域誌』
平成四年　建設省中部地方建設局
『輪中―その形成と推移』
昭和六三年　安藤萬壽男
『岐阜県の地名』平成元年　平凡社
『愛知県の地名』平成元年　平凡社
『三重県の地名』平成元年　平凡社

研究資料

木曽岬町文学散策

木曽岬町教育委員会教育課　大喜多啓介



大喜多 啓介 氏

昭和50年生まれ
愛媛大学教育学部卒業
愛媛大学大学院教育学研究科
教科教育専攻国語教育専修修士課程修了

現在
木曽岬町教育委員会教育課係長兼指導主事

山口誓子の句碑

「青葭（あおあし）に芭蕉の水路なほ残る」

昭和を代表する俳人山口誓子のこの句碑は、木曽川下流に位置する桑名郡木曽岬町の白鷺川跡に、七里の渡しの記念碑として昭和五六年に建立されたものです。

『木曽岬町史』によると、「山口誓子が東海道七里の渡し跡を、弥富町の村瀬医院の村瀬守男の案内で漫歩され本町の白鷺川跡に立って『青葭に芭蕉の水路なほ残る』と発句した」とあります。〝発句した〟とあるのは、〝俳句を詠んだ〟としてもよいのですが、連句（二人以上で句をつないで一つの作品に仕上げる文芸）の最初の五・七・五を特に〝発句〟と呼ぶことから、あるいは、案内された村瀬氏（その文学仲間）と連句を楽しんだのかも知れません。

山口誓子の句碑

そのあたりを詳しく知ることはできないものかと、村瀬医院に問い合わせてみたところ、村瀬守男氏当人はおられず、身内にも当時のことを詳しく知る方は見えないとのことでしたが、当時の様子に詳しいということで、現在「かたりべ小劇場」を主宰、「弥富文学研究会」の代表でもある大島静雄氏をご紹介いただきました。

大正生まれで八〇歳を超えておられる大島氏ですが、文学に注ぐ情熱はまったく衰えを知らず、村瀬守男氏のこと、山口誓子のことなど、参考文献を含め、たくさんご教示いただきました。

冒頭紹介した「青葭に芭蕉の水路なほ残る」の句碑も、大島氏にご紹介いただいた『やとみ文学散歩』に掲載されており、それによれば

「誓子の句碑は至るところに点在するが、一番多く建立されているのは三重県内であり、あと岐阜県、愛知県となっている。数多くの句碑は各地の美しい景色の中にあって、その存在を示し俳人ならずとも、これらの句碑に出合えば周囲の景色をあらためて見直すことにもなり、日本の美しさを再確認することでしょう。」

とあります。ここからも、山口誓子と三重県との深いつながりを知ることができます。

ちなみに、『木曽岬町史』において、

木曽川下流部の葦原

山口誓子を案内したとされる村瀬守男氏についても本書では詳しく述べられており、俳号「水螢」も師事した山口誓子に賜ったものであるということです。村瀬氏は残念ながら平成十一年に逝去されていますが、弥富名産の金魚を詠んだ句も多く残されています。

金魚田の夕焼け水の底までも
捨て金魚川に放たれいきいきと
村瀬水螢氏作品

また、木曽岬町において「青葭に芭蕉の水路なほ残る」と詠んだ山口誓子も、弥富を訪れた際には金魚を題材にした句を残しています。『やとみ文学散歩』によれば、

「誓子には金魚の句が沢山にあり、そのほとんどが弥富で作られた。弥富の金魚は誓子によって、その一門をはじめ多くの俳人に広められたと言っても過言ではない。」

と述べられています。

群金魚曲流なして槽廻る
山口誓子

話が少しそれましたが、山口誓子が訪れたその土地ならではの風景を句に表していたということであれば、弥富が金魚であったように、木曽岬（三重県）は七里の渡しであり芭蕉であったということでしょう。

七里の渡し

東海道の宿駅熱田（宮宿）と桑名を渡舟で結ぶ海上航路は「七里の渡し」として有名です。七里の渡しは、渡る舟の大小・天候のよしあし・潮の満干などの影響で航路を変えていましたが、木曽岬の白鷺川（明治二十年代の木曽三川改修工事で締め切られる）を通る航路は満潮時の航路だったようです。

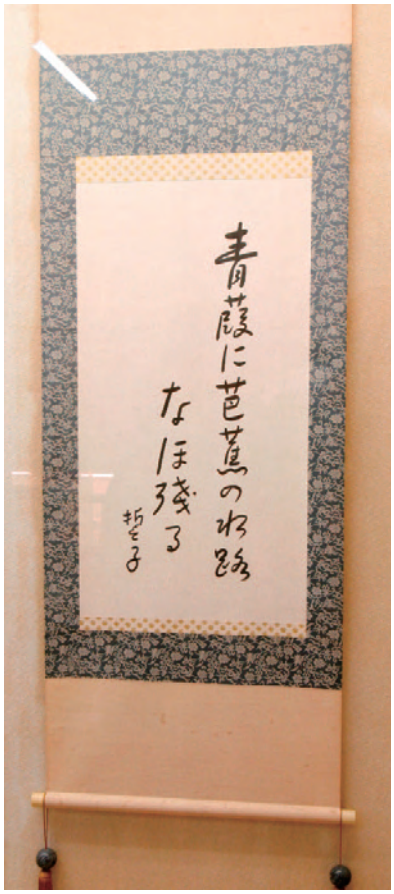
明治の時代に締め切られた白鷺川ですから、誓子の頃にも七里の渡しの名残はなかったものと思われますが、ただ「青葭」のみが当時の面影を残していると詠んだのでしょう。「芭蕉の水路」はもちろん〝七里の渡し〟のこと。ここに誓子の芭蕉への思いをくみ取ることができます。

七里の渡し案内板

山口誓子と芭蕉

後に俳聖と称される松尾芭蕉は、紀行文『おくのほそ道』で有名ですが、漂泊の俳人とも呼ばれるように、旅を題材にした作品を多く残しています。では、芭蕉が実際に七里の渡しを通ったのはいつだったのでしょうか。二つ考えられます。一つは、芭蕉四十一～四十二歳・貞享元年（一六八四）、江戸から故郷伊賀上野に向けての旅（『野ざらし紀行』）。もう一つは、芭蕉四十四～四十五歳・貞享四年江戸を出発し東海道を下る旅（『笈の小文』）です。

誓子が「芭蕉の水路」と詠んだのがどちらの旅であったのかを知ることはできませんが、遠く芭蕉の時代に思いをめぐらし、青々と茂る葭に七里の渡しの風景を思い重ねたということは言えると思います。



「青葭に芭蕉の水路なほ残る」掛け軸

山口誓子全集第6巻「古典研究集」第1章「芭蕉・蕪村研究」に、『笈の小文』に載せられている作品の中ですばらしい句として、

鷹ひとつ　見つけてうれし
いらこ崎

があげられています。『笈の小文』の旅で渥美半島の伊良湖を訪れた芭蕉は、その後熱田を巡り、

磨ぎなほす　鏡も清し　雪の花
（熱田神宮の修復された神鏡を詠んだ句）

蓬左（現在の名古屋）を経て、七里の渡しを通って故郷伊賀上野に向かったのです。

芭蕉と木曽岬町

山口誓子が芭蕉に思いをめぐらせ、「青葭に芭蕉の水路なほ残る」と詠ん

だように、木曽岬町にも芭蕉の影響が及んでいたことを知ることができます。ここでは、木曽岬町にある二つの芭蕉句碑を紹介します。

永き日を　囀りたらぬ
ひばりかな

「永き日を囀りたらぬひばりかな」句碑

木曽岬町外平喜了清寺にある句碑に刻まれた句です。宝暦八年（一七五八年）に建立されました。

青柳の　泥にしたたる　汐いかな

木曽岬町上和泉源盛院にある句碑に刻まれた句です。同じく宝暦八年（一七五八年）に建立されました。いずれの句碑も芭蕉の死後半世紀を経て建立されていることから、当時からすでに木曽岬町にも芭蕉熱が浸透していたことがうかがえます。

ここまで「木曽岬町文学散策」というテーマで、木曽岬町に残る句碑を中心に述べてきました。研究というよりは、むしろあてもなく気軽に山口誓子や芭蕉に思いをはせるといった趣になっているので、あえて「散策」という言葉を使いました。今や弥富市と陸続きになり、七里の渡しもほとんどその面影を残していない木曽岬町ですが、堤防にそって生い茂る葦原にかつて渡し舟が行き交ったその残像を見ることができるのです。

「青柳の泥にしたたる汐いかな」句碑

木曽川に架かる尾張大橋を望む

■参考文献
『木曽岬町史』
『やとみ文学散歩』弥富文学研究会編著
『木曽川は語る―川と人の関係史』
木曽川文化研究会著：風媒社
『山口誓子全集第六巻』
山口誓子著：明治書院
『現代俳句大事典』
鷹羽狩行・大岡信・稲畑汀子監修：三省堂
『新潮日本古典集成　芭蕉文集』
富山奏校注：新潮社

大寺瞽女（おおてらごじょ）

御嵩町中村

昔の可児川は堤が無いので、大雨が降ると家も田畑も水びたしになって、悪い病気がはやりました。

病気に困っている村に、行智比丘尼（ぎょうちびくに）が侍女三人を伴って訪れました。行智様は、村人の苦しむのを見かねて、宿の薬師本尊に朝夕お経をあげ、侍女と共に薬草を摘んで病人の看病をしました。それでも病人は一向に良くならないので、疲れた行智様が、池の岸に座って念仏を唱えると無数の蟹が池の中からぞくぞくと這い上がってきました。

「何であろうか」と不思議に思って覗いてみると蟹の群の上に、小さな仏様がのっておられました。

「ああ、薬師如来様が助けにきてくれたに違いない」さっそく金の小さな薬師如来様を庵に設置して毎日勤行をつづけられました。そのうちに寝こんでいた大勢の病人が元気になり、洪水も起こらないようになって、もとの穏やかな村に戻っていました。

村の人の信心が深まり、行智様を心から慕うようになっていた或る日、行智様が隣村に出かけることになりました。三人の侍女は、悪い病気を退散させた薬師如来様を一目拝んで見たいものと、仏様の安置された部屋の扉を開けてしまいました。

「あっ」余りのまぶしさに三人は目を閉じてしまいました。そして思わず閉じた三人の目はそれから開くことはありませんでした。

帰ってきた行智様は、三人の目がひらくように念仏を唱えられましたが、ついに叶いませんでした。そこで行智様は、薬師如来様を薬師本尊の胎内に収められました。

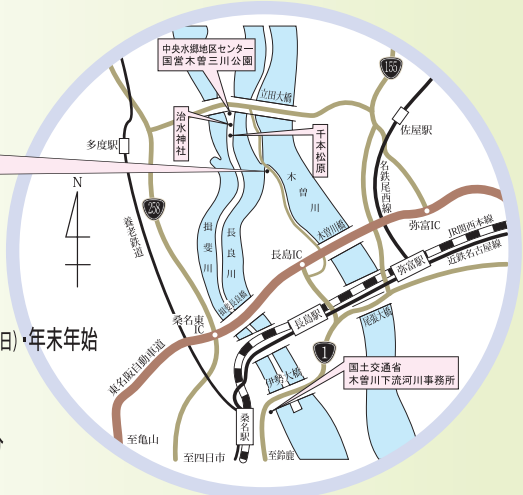
それから行智様は三人の侍女に楽器の演奏を教え、盲目の三人は、楽器を弾き薬師様を讃える唄を歌いながら、近隣の村々の家を廻りました。

この辺りでは、明治の終わり頃まで、大寺瞽女と言って盲目の女が門づけをして歩いていました。

木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫



《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休 館 日》
毎週月・火曜日（月・火曜日が祝祭日の時は翌日）・年末年始

《入 館 料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

KISSOホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

前号につづき「歴史記録 輪中堤の変遷」の2回目を特集いたします。研究資料では、木曽岬町の大喜多氏に町内の文学碑について寄稿いただきました。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「鬼岩」
可児川の源流域にあたる鬼岩は、花崗岩が何百万年にわたって侵食されてできた巨岩や奇石がある観光地となっています。また、ツツジやモミジが多くあり、秋は紅葉の名所となっています。

中
「真名田防災溜池」
国道21号を大庭交差点で北に折れて緩やかな丘陵地を登ると、左手に真名田防災溜池の水面が現れます。池の東側は閑静な住宅地で西側は深い森が広がっています。北端には真名田親水公園が整備され近隣住民の憩いの場となっています。

下
「可児川」（新川橋より）
御嵩町市街地の東のはずれで国道21号を南に入り、工業団地「グリーンテクノみたけ」に通じる道は新川橋で可児川を渡ります。橋から見下ろす可児川は流れの細い小河川ですが、これより下流で丘陵地から流れ出た谷川を合わせて流量を増やしていきます。

『KISSO』Vol.80 平成23年10月発行

編集・発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465 TEL（0594）24-5715 ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/